◆ 講演 「現代のラテンアメリカ」第2部

ベネズエラのクリスマス～カーニバルの音楽文化

石 橋 純

はじめに

日本でベネズエラの音楽を聴く機会は滅多にない。アルゼンチン、ブラジル、ボリビアなど、リスナーのみならず多くの日本人プレイヤーさえをも獲得している南米諸国の音楽とは大きな隔たりがある。唯一の例外ともいえる楽曲に「コーヒールンバ」があるものの、奇抜な日本語詞とともに昭和歌謡の定番となったこの旋律が、ベネズエラ産であることを知る人もまた少ない。ベネズエラ―日本両国間の乏しい人物・経済交流は、音楽に限らず、両国の人びとと文化のイメージを、お互いに希薄なあるいはステレオタイプ化されたものにしている。

じつのところ、日本のみならず、ベネズエラ音楽は国外で広くは知られていないのだ。1970年代まで米国資本へのコンセッションにより経営される石油産業を基盤として近代化したベネズエラでは、たとえばメキシコのような、伝統音楽・舞踊を国内外に普及させる目的の国策歌舞団の育成は持続しなかった。文化産業はもっぱら外国文化を輸入することを優先し、アルゼンチンのような国産メディアによる民謡創作も発展しなかった。移民受入国であったベネズエラは、送出国であるコロンビアのような草の根コロニーを通じて自国文化を国外に伝える経験にも乏しい。

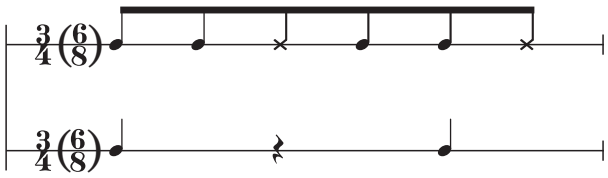
そんなベネズエラの「知られざる」音楽を、実演つきで案内・解説する機会を、立教大学からいただいた。本稿は、2012年12月15日太刀川記念ホールでおこなわれた講演会・第43回現代のラテンアメリカ「ベネズエラのクリスマス～カーニバルの音楽文化」（主催：立教大学・ラテンアメリカ研究所、講演：石橋純、演奏：エストゥディアンティーナ駒場）にもとづき、その内容の一端を紹介するものである。

ベネズエラの代表的音楽ジャンル

日本の2.4倍の国土に、カリブ海岸、アンデス高地、アマゾン熱帯雨林、大河オリノコ流域の広大なサバンナとデルタなど、変化にとんだ地形と気候を有するベネズエラ。この地に住み着いた先住民、ヨーロッパ系人、アフリカ人の子孫たち、さらに19世紀以降全世界から到来した移民たちは、混血と文化混淆を繰り返しながら今日のベネズエラ国民を形成した。このような国土と人びとが生み出した音楽もまたきわめて多様である[1)]。

そうしたベネズエラ各地の民衆音楽のなかで、こんにち「国民音楽」の地位を得たジャンルは「ホローポ joropo」と呼ばれる。ベネズエラの農村部の広域で、さまざまなホローポが演奏され、踊られる。ホローポの演奏に使われるベネズエラの伝統楽器は、和声楽器のクアトロ（4弦ギター）、旋律楽器のハープもしくはマンドリンもしくはバンドーラ（南米式民俗マンドリン）、そして打楽器のマラカスなどである。なかでも、ベネズエラ南西部からコロンビア国境の向こう側まで広がる平原地方（ジャノス）は、20世紀の国民文化創造運動のなかで、ホローポの「本場」として設定されてきた[2)]。

ホローポの音楽的特徴はまず、3拍子と2拍子が拮抗する独特のリズムにある（下記譜例参照）。この複合リズムの基本パターンは、ホローポのみならず、ベネズエラの音楽文化の根幹をなす「ノリ」と言える。伝統的なホローポには、定まった旋律の概念がない。演奏者たちは、循環する和声進行の型をいくつも伝承・共有している。この型にもとづいて、楽器奏者は即興的に旋律を紡ぎだし、歌手は吟遊詩人さながらの即興詞を歌う。二人の歌手が即興詞のバトルを繰り広げる歌試合（コントラプンテオ）は、ホローポのもっとも高度な遊びの形態である。



農村部のダンス音楽であったホローポは、19世紀末から都市の教養人によっても創作の着想源とされた。ロマン主義芸術の影響下、ピアノや室内楽、管弦楽による「ベネズエラ舞踊＝ホローポ」の作品がぞくぞくと創作された。ベネズエラ第二の国歌と呼ばれる「平原の魂 Alma Llanera」はこうした都市教養人の手により20世紀初頭に作曲された「新民謡」である。ホローポはまたヨーロッパ伝来のワルツ（スペイン語ではバルス）にも影響を与えた。ベネズエラのバルスは、こんにちホローポと同一の複合拍子で演奏される。世界中のギタリストから愛奏される楽曲、アントニオ・ラウロ作曲の「ナタリア Natalia」（バルス第3番）は、そのようなベネズエラ流ワルツの有名曲である。スローなワルツは、ベネズエラ的メランコリーの究極の表現ともいわれる。ジャズで言えば、シンプルなブルース系の曲目のように、演者は即興をまじえつつ憂愁の炎を揺らめかせる[3)]。

農村部のベネズエラ音楽の典型的ジャンルがホローポだとすれば、都市のベネズエラ音楽を代表する存在にメレンゲがある。8分の5拍子という南米でも珍しいリズムで演奏される。ドミニカ共和国のメレンゲ（4分の2拍子）とはまったくの別物である。1920年代から40年代にかけて社会風刺やユーモアをこめた歌詞（次頁参照）が北米のジャズの影響をうけたサウンドに乗せて歌われ、踊られた。その後、ダンス音楽としての地位は凋落したが、こんにちも、都市のベネズエラ音楽の精髄を伝えるジャンルとして、歌や器楽のメレンゲが生み出されている[4)]。

エストゥディアンティーナ駒場（講演当日）

ベネズエラの代表的民俗楽器：
左からクアトロ、バンドーラ、マラカス

北はキメラ

詞曲：ルイス・フラガチャン

おいらはニューヨークに行った
小ガネを稼ぐために
でもカラカスに戻ってきた
七面鳥を追うムチみたいな勢いで

北はわけのわからない所
うんざりだ！
聞いて呆れる
「王侯ぐらし」

ああ、ニューヨーク
金貨で釣ろうったてだめ
おタクの禁酒法はまっぴらだ
お気の毒さま、御免だよ

ニューヨークには
もう行かない
あそこにはワインもなければ
クレソンも恋もない

クリスマスからカーニバル時期の音楽

ホローポ、バルス、メレンゲなど代表的ジャンルでさえ日本では実演される機会は少ないが、クリスマスからカーニバルのシーズン音楽となると、聴取の機会はさらに稀少となる。ベネズエラのクリスマス･ソングを代表するジャンルには、アギナルド aguinaldoとガイタ gaitaがある。

アギナルドはベネズエラ流クリスマス頌歌である。そのほとんどは明るくにぎやかなダンス音楽である。アギナルドは主として口承で伝えられてきた。音楽産業を介して「ヒット曲」が大量に流通することもない。アギナルドが伝承される特別な「場」に「クリスマスのパランダ parranda navideña」というものがある。これは、職場・学校・隣近所の気の合った仲間同士がにわか楽団を結成し、歌い囃しながら、予告なしに他人のオフィスや家庭を「襲撃」する遊びである。12月のある日、突然ドアがノックされ、「怪しいものじゃありません ¡Gente de paz!」という叫び声が聞こえると、ベネズエラの人たちは「来たっ！」と身構える。それがパランダ訪問の合言葉なのだ。こうして乱入するパランダ連中は、酒と料理を振るまわれるか、心づけをもらうまで、歌い続けるのだ[5]。

いっぽうのガイタは、一流楽団がマスメディアを介してヒット曲を流通させる、年末シーズンに欠かせないポピュラー・ダンス音楽である。もともとは西北部のスリア地方の民謡であったものが、1960年代に全国に広まった。鉦と太鼓、大人数のコーラスで編成されるガイタは、

鋭い社会批評性もあわせもつ祭宴音楽である。年末のダンスイベントでは、スタジアムに集まった数万人の群衆がガイタの調べに合わせて熱狂的に歌い踊る[6]。

クリスマスシーズンが終わると、南米の人々はカーニバルを心待ちにする。ベネズエラのカーニバル音楽としてもっとも盛んに演奏されるジャンルはカリプソである。カリプソと言えば、がんらいトリニダードをはじめとする英語圏カリブの歌謡として知られる。19世紀中ごろに起ったゴールドラッシュとともにベネズエラに移民した英仏語圏カリブの人々が、島々の流儀のカーニバルパレードとともに伝えた。ベネズエラのカリプソの本場と言われる金の町エルカジャオの、もっとも伝統的なカリプソは英語やフレンチクレオールで歌われている。「本場」英語圏の国々では19世紀末、当局の圧力によりアフリカ伝来の太鼓が禁止された。このことが、スティールパン／スティールバンドを生む遠因となった。いっぽう、英語圏の法令とは無縁の南米大陸に伝承されたベネズエラのカリプソでは、昔ながらの太鼓が使用され続けている[7]。

ベネズエラ流音楽の集い、エストゥディアンティーナ

ところで、このようなベネズエラ音楽の合奏スタイルとして私たちが採用した「エストゥディアンティーナ」について述べておこう。「エストスディアンティーナ estudiantina」とは、スペイン語圏諸国に伝承される音楽演奏形態の名称である。地域差があるが、その意味するところは、「地元に伝承されるギター属ならびにマンドリン属の撥弦楽器を中心に、他の弦楽器、管楽器ならびにリズム楽器を持ちより、気のあった仲間が集まって地元の伝統音楽やスペイン語圏のスタンダード曲などを演奏する楽団」のことだ。

スペイン語の estudiantina の原義には「学生のたまり場」的な含意がある。学生の集まりに楽器を投入すれば、たちまち音楽の宴が始まるといった語義の発展を想像させる。国によっては、エストゥディアンティーナの呼称にもかかわらず、「学生」という主体性が消えて、伝統的弦楽器とその楽曲を伝承するためのアンサンブル形態を指す呼称に変化した地域もある（コロンビア以南のアンデス諸国など）。その名称には似つかわしくないハゲオヤジだけの集団もあるのだ。

逆に、「元祖」スペインで、「トゥナ tuna」と呼ばれることが多いエストゥディアンティーナは、大学限定の文化として伝承されており、学部ごとに結成される。トゥナの正メンバーになると中世の大学生の服装を衣装として身にまとい、ヨーロッパじゅうを投げ銭目当ての演奏をしながら放浪することが、しきたりになっている。スペインのトゥナは、男子限定であり、日本の応援団のような独特の大学文化を継承している。

ベネズエラではどうかというと、中高等課程から大学まで、気のあう仲間が集まって、クアトロとマンドリンを中心に他のさまざまな楽器が加わって、主としてベネズエラ都市の民衆音楽を演奏する合奏団をエストゥディアンティーナと呼ぶ。大学のエストゥディアンティーナに学外の人が加わることもある。職場のサークル活動的な楽団も伝統的弦楽器が中心になっていればエストゥディアンティーナと呼ばれる。男女混成である。そこでは、歌って、弾いて楽しみ、時には発表会のようなものも催すが、そのほかに重要な活動が二つある。

ひとつは、前述の「クリスマスのパランダ」であり、もうひとつは、セレナータ serenataと呼ばれる。セレナータとは、（愛する）女性の家の窓辺で、深夜に前触れなしに音楽の贈り物を

ささげる行為だ。仲間の女子を対象に自分たちが楽しむことが目的のセレナータもあれば、音楽仲間の力を借りて告白のお膳立てをもくろむ本気のセレナータまでさまざまある。「遊び」と「マジ」の行為が切れ目無く連続しているのがラテンアメリカ民衆文化の楽しい部分だ。首都カラカスは、道路網と高層ビルが錯綜する混沌とした近代都市だが、いまだにセレナータは生きた伝統でありつづけている。

エストゥディアンティーナ駒場の活動

ベネズエラの音楽を日本に紹介する活動に、私は25年にわたって携わってきた。ベネズエラのさまざまな音楽文化を概説し、名人名演を評論し、さらには日本市場向けにCDやコンサートもプロデュースしてきた。こうした活動は一定の成果を上げ、ベネズエラの音楽に関する知見も、じょじょに広まりつつある。近年は日本人によるベネズエラの音楽の実演活動にも関与するようになった。そこで実感したのは、「複雑」と言われるベネズエラのリズムは、実演体験を通したほうが、日本人には理解しやすいということだ。こうした経験に想を得て、2009年より東京大学教養学部の正規科目のひとつとして、ベネズエラ音楽の演奏を教習している。この授業の修了生を集めて結成したのが《エストゥディアンティーナ駒場》である。

エストゥディアンティーナ駒場は、ベネズエラの伝統音楽と現代ポピュラー音楽を練習し、それを発表するコンサート活動を続けているが、同時に音楽周辺のベネズエラ文化も模擬体験するよう試みている。毎年12月も第2週を過ぎると、私のスペイン語の教室にいつパランダが乱入してくるか、ドキドキしながら授業を進める。仲間のサポートを得て恋人にセレナータをささげた団員も何人かいるようである（自宅生の窓辺で真夜中に歌う度胸のある“ラテン系”男子は、残念ながらまだ出現していないが）。ベネズエラからの来日音楽家を囲んで催す私たちの宴会は、ひとたび演奏が始まれば2度と止まらない、ベネズエラ流の音楽の宴（これもまたパランダと呼ばれる）である。

おわりに

ブラジル音楽にせよ、ボリビア音楽にせよ、音楽の世界市場のなかで起こったブームの時期を経て、今の日本に定着し、多くの愛好者を得ている。まったくそうした追い風のないなかで携わるベネズエラ音楽普及活動は、「いま、ここ」でやりとりされる音楽の喜びだけを原動力にしている。日本との間に人物交流の希薄な、人びとの意識に平素はのぼらない南米北部の「辺境」の音楽を実演することは、きわめつけのマイナー文化活動であるだろう。逆に、だからこそ、ベネズエラ音楽の楽しさを日本に伝える活動の価値を、私は見出している。なぜなら、それは、「ベネズエラ」という一国の音楽について知る体験にとどまらず、マスメディアにまったく露出しない「異文化」への感性を開くことにもつながると信ずるからである。

〈註〉

1）以下で取りあげるベネズエラ音楽についてより包括的な概説は、石橋（2010）に、またホローポについての詳細は石橋（2002）ならびに石橋（2012）を参照のこと。

2）今回の講演では、バンドーラ、クアトロ、マラカス、ベース、歌の編成で、平原地方のホローポ「エロルサの祭り」（Fiesta en Elorza）「カルナバル」（Carnaval）「ガバン」（Gabán）を実演した。

3）講演では、現代のバルスのなかから「待ち焦がれて」（Anhelante）を実演した。

4）講演では、北米資本主義文化を批判する1920年代の風刺ソング「北はキメラ」（El Norte es una quimera）と、現代のバラード風ラブソング「クリオジシマ」Criollísimaを実演した。

5）講演では、クリスマスのパランダで歌われるアギナルドの伝統曲「トゥントゥン」（Tun tun）「ディンディンディン」（Din din din）「カルパノのアギナルド」（Aguinald carupanero）を、実演した。

6）講演では、伝統的なガイタの曲「私の哀愁」（Mi nostalgia）を実演した。

7）講演では、英語とフレンチクレオールの詞による伝承曲をメドレーで実演し、カリブの島からベネズエラにカーニバル文化を伝えた移民の伝統を偲んだ。

〈参考文献〉

・石橋純（2002）「大平原の荒々しく奔放な美学:ベネズエラの「国民音楽」ホローポ」石橋純『熱帯の祭りと宴：カリブ海域音楽紀行』つげ書房新社 pp.260–282.

・石橋純（2010）「ベネズエラ――更新され続ける伝統」石橋純（編）『中南米の音楽――歌・踊り・祝宴を生きる人々』東京堂出版 pp.129–148.

・石橋純（2012）「ベネズエラ民謡《ホローポ》の創造――知識人と民衆知」 細川周平（編）『民謡からみた世界音楽――うたの地脈を探る』ミネルヴァ書房 pp. 255–271.

（いしばし　じゅん　東京大学大学院総合文化研究科准教授）